

## 令和4年度 第1回 木の文化都市を継承・創出する金沢会議 発言要旨

日 時：令和4年8月31日（水） 10：00～11：45

場 所：金沢市役所7階 第4委員会室

### ■議題1：令和4年度の事業について

#### <公共施設での積極的な木の利用について>

・以前から話が出ていたが、木造の象徴的な建物をどこかに一つ建てるのが金沢市の姿勢を示すことにつながると思われる。市の必要な公共施設を検討した上で、近い将来実現するリーディングプラン、ドリームプランがあった方が良いと思う。

・鉄筋コンクリート造や鉄骨造では施工が難しい箇所でも木造ではできる場合がある。新築ではお金がかかるという考えもあるのかもしれないが、全国的には木造の利点を生かした増築例も出てきているため、幅広く考えた方が良い。木造で挑戦できるシーンは、探そうと思えば探せるだろうと思う。

#### <「木の文化都市・金沢」金沢にふさわしい住宅モデル策定事業について>

・現在、景観の届出が不要とされている市街地では、ハウスメーカーの住宅に置き換わっている。こういった場所でこういったものを提案できるかが重要である。

・コストが高いと市民は取り組みづらい。新しいモデルが市民の選択肢の一つになるようなアイデアが出ると良い。

・現在では、旧市街地よりも周辺に住んでいる市民の方が多い中で、町家をどう定義するか。町家とは「町に住む人たちの住居」であり、目的で言えば「タウンハウス」と言い換えることもできるだろう。

郊外における宅地割は旧市街地のものと異なるため、金沢の気候風土に合った木の使われ方としての新しい住居形態が生まれてくるということも、一つの町家文化になっていくのではないかと感じる。金澤町家と新たな町家を区別して市民や民間事業者等にPRすれば、新しい流れにもなる。

・「和風の住まい方」と言った時に、畳の上でちゃぶ台というだけでなく、畳の上でイス・テーブルの生活でも良いのではないか。住宅モデルを示す時に外観だけでなく、暮らし方や内装等も含めて考えていくと、広い意味での木の文化都市につながる。

・住宅モデル策定事業について、郊外の住宅にまで求めるものか。また、それ以前に木造住宅に金沢らしさを込めていくことが一つのテーマであると考えている。

瑞樹団地で取り組むとのことだが、元々ほとんどが木造で構成されている団地でもあるので、これまでの取組とどう違いをつけるか。これから先の木造のあり方を考えるテーマや工夫などの要素も検討してほしい。

・戦後の郊外住宅地は、車社会への対応、個室化など、古い金沢の町家からの脱却でもあった。現在、市民の7～8割が郊外に住むようになったが、郊外住宅地も40年を経過して、建替えの時期に入ってきており、空き家も出てきている。こういった状況の中で、木の文化で何ができるか？という問いなのではないかと考えている。

雪への対応やコミュニティのあり方などテーマがたくさんあり、木の文化でそれぞれの問題を串ざしにして金沢で何ができるかという壮大な挑戦にも見える。

#### <歴史的建築物活用推進事業、金澤町家保全活用推進事業について>

・歴史的建築物活用については、国の方でも数年前にガイドラインを出して、既存不適格をどう解決していくかの方向性を示した。最近では具体的事例が出てきている。防災的な観点からすると、既存不適格部分の解決策はかなりわかってきている。

・京町家に関する技術的な基準づくりは阪神淡路大震災が契機となった。当初は大学の研究に頼っていた部分が大きかったのも事実である。伝統工法の基準づくりには、実験や研究が必要であり、地方によって工法が違うので、京都市の先例があるとしても結構大変である。

これを全て金沢市で支援するのは財政的に難しいため、大学や研究者が研究費を確保しやすい仕組みづくりをし、外部資金をうまく活用した方が良い。

### <金沢型推進体制の構築に向けた研究事業について>

・モデル地区（尾張町）における中層木造の設計について、4階建てくらいの建物だと全国的にも事例がかなり出てきている。4～5年前からだいぶ様相が変わってきており、リアルに建築されるものではなくても、リアリティのある内容にした方が良いと思われる。

・仮想設計のねらいとしては、旧市街地の間口の狭い細長い敷地形状における一般解・プロトタイプのようなものを目指しているという認識か。あまり特殊なものではなく、民間の方が少し頑張ればできるのではないかと目指してはどうか。

・ファサードが小さく細長い敷地というのは、一種の密集市街地の典型的な敷地とも言える。密集市街地では道路が狭く、鉄筋コンクリート造や鉄骨造の工事が難しいこともあり、また地盤が悪い場合なども、木造のメリットがかなりある。トライアルとしての事例はあるが、魅力的なものはあまりない。歴史的な市街地は全国的にあるものの、現代的な工法で作られた木造の建築はあまり事例がない。発信力の強いものができるのではないかと期待している。

・尾張町のエリアは、容積率等の条件の割にはおとなしい建物とを感じる。また木造4階建ては全国でもあまり珍しくないということであれば、もっと防火・耐火面でもチャレンジなやり方ができると思う。また、コスト面の試算や減価償却期間についても多様な検討ができると思われる。

### <取組全般について>

・木の文化として明確に一つの方向性を定めるのは難しい。一つ一つの事業や営みを積み重ねた結果として方向が出てくるものと考えている。金沢における景観の問題も50年前から始まっているが、最初から一つの方向性が決まっていたわけではない。

木の文化も30～50年経った時に金沢が他の都市と違うことがわかるものなのではないか。今からあまり絞り込まずに、いろいろなことをやってみるのが今の段階と考えている。

## ■議題2：木の文化都市推進計画について

・計画のバランスとしては非常に良いと感じる。気になる点としては、森林などの供給エリアは金沢市域の中だけで全てを充足できるものではない。計画に位置付けることは難しいのかもしれないが、木の文化を日本全体の文化運動として広めていく視点や、供給エリアである県内外の他市町村と金沢市が連携して、木の文化の取組が将来的に供給エリアの活性化も図っていく視点も示した方が良い。

・経済活動や生業を創出していくものにつながるものが、サステナビリティを担保するためには重要ではないか。現状、森林はあっても木材が流通しないことはそういったところも要因になっていると思う。

経済の流通の中に、どう木の文化の考えを組み込んでいくか。その大枠の中でビジョンが見えてくると、民間企業も積極的に参画することができ、その結果として市民の生活に木が取り込まれることになるので、行政としてはそういったビジョンを示すことも大事であると考えている。

・推進計画の内容として、新しく作るものの要素が多い気がする。もう少し継承の部分に配慮してほしい。また、アクションプランにしようとするほど、長期間にわたる取組というよりは、直近の施策ばかり見えてしまうため、第1章部分に重点を置いて良いと思っている。

・量の問題ではなく、森林があって木材が供給されるというストーリーを、木の文化としてきちんととらえていく方針を金沢では作っていきたい。その中から金沢方式のようなものが見つかり、他の取り組んでいる地域と切磋琢磨して日本全体で進めていくことが大事である。

金沢では、域外の木材が入ってくることは当然の成り行きであるので、それをどう解釈していくかはこちら側の姿勢にあると考えている。

・現在では子ども達だけでなく、親も木の扱いに慣れていない、木を使うことが暮らしから離れてしまっているので、金沢では少しでも近づけられれば良いと考えている。

木のお椀、木の器、木の家具や木の家など、本当は手で作ることができるはずであり、木は身近なものだったはずである。木をもう一度市民にどう近づけていくかが必要では。

・推進計画 P. 15 で示した 5 つの方向性は非常に良いと思う。こういうものが、身近に感じられる存在として、具体的に見えてきた時に木の文化が成立していると言えるのではないか。推進エリアや重点エリアに関しても、いろいろ試行錯誤してみながらアプローチし続けることが大事である。

・個人的に木の文化都市の実現イメージは、都心軸沿いであれば現代木造建築に建て替わり、継承エリアであれば金澤町家と令和の金澤町家の混在、創出エリアでは瑞樹団地をモデルに、といったものを考えている。

また期間としては、都心軸や継承エリアは 30 年くらいで実現、尾張町のモデル地区では 15 年くらいで実現するなど、一般市民にわかりやすくするためには具体的なものを提示する必要があると思う。